

ニッポン ドクター和の 臨終図巻



あれは5月のこと、僕らの地元

・兵庫県立芸術文化センター(西宮市)に小三治さんが来たど嬉しそうに話す患者さんがいました。

「緊急事態宣言で延期になっていたけど、やっと小三治の断が聞けたよ。先生、〈粗忽長屋〉って知っか?」

「…ごめん。落語は疎くて」
「先生は死ぬ本をいっぱい書いてるくせに〈粗忽長屋〉を知らんのか。一度、小三治の落語を聞きに行ったらどうがええ」

じゃあ今度兵庫に来た時は…と思っていたのに願いが叶わず残念です。人間国宝の落語家、柳家小三治さんが10月7日に都内の自宅で亡くなりました。享年81。死因は、心不全でした。

5日前には高座に上がり、死の当日も、普通に朝食を食べて、歯科へ行き、帰宅後に入浴。その夜、部屋で倒れているのを妻が発

226 落語家 柳家小三治



コロナの時代になっても居直る覚悟

長尾和宏(ながお・かずひろ) 医学博士。東京医大卒業後、大阪第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。

見。救急車を呼んだものの、帰らぬ人となりました。
〈粗忽長屋〉は、自分が死んだことに気づかず、うっかり長屋に帰ってきた男の話だそうです。小三治さんもおそろしく、急ぎすぎて、死んだことに気が付いていな

いでは。羨ましいくらいのピンピンコロリです。しかし、小三治さんの人生は、多くの病との闘いでもありました。リウマチや糖尿病を抱え、2017年には頸椎を手術。その後、腎機能障害で入院し、この5月に復帰したばかり。落語協会会長の柳亭市馬さんは追悼文でこんなことを仰っています。

「寂しくなりますが、『もうあんなに沢山、薬を飲まなくてもいいんだな』と思つと、少しだけほつとします」
今、高齢者を悩ませているのが、寝たきりになった高齢者が、薬を減らしただけで元気に歩いて食べられるようになるのは、僕にとっては日常の光景。まるで落語みたいなハナシです。
さて小三治さんは、昨夏のインタビューでコロナについてこんなふうに語っています。

「いろんな病気をして酷い目にあってきました。いい目にもあってきました。だから、コロナの時代になっても居直る覚悟はできてたんじゃないですか」
居直る覚悟—どんな薬よりも大事なものかもしれません。